

田舎者 ジュリアン・ソレル
JULIEN SOREL UN PROVINCIAL

博士後期課程 仏文学専攻 3年

石 田 明 夫
AKIO ISHIDA

ジュリアン・ソレルの生まれて育った町、ヴェリエールは一人の旅人の目と耳を通して描かれる。この田舎町には何の特色もない。美しい町には違いないのだが、この町の人達は美という感覚をときすますには、あまりに金もうけに執心しすぎる。《ヴェラ山のぎざぎざの頂は十月はじめての寒さが来ると雪におおわれる。》(p.3)という町からの眺めは、ヴェリエールの人達には無縁である。そんなことより、そこからほとぼり出る急流が工業に動力を与える、ということの方が重要なのだ。又、彼らが美しい国という意識を持ち、それを自慢するのも、他国から旅行者を呼びよせ、その落とす金が目あてなのである。旅人が見る町長こそその典型だ。《結局、この男の才能は貸した金はじつにがっちり支払わせるが、借りた金はできるだけ遅く支払う。》(p.4)という一言で、彼の、というより、町の人達の気質がわかる。そして、これが普通の町長であり、普通の田舎町なのである。

町長レナール氏が妻と腕を組んで散歩している場面がズームアップされ、遠くから眺めていた旅人は姿を消し、読者にのり移る。そして、ジュリアン・ソレルが登場するまで、読者は旅人の眼と耳で、ヴェリエールの人達、レナール夫妻、シェラン神父、ソレル親子を知るのである。

レナール夫妻の立ち話を耳にした読者は四章でそのうわさの人物、ジュリアンを見る。

《彼は頬を紅くして目を伏せていた。見たところ弱々しい十八・九の小柄な若者で、わし鼻の、ととのってはいないが美しい顔立ちだった。静かなときには、思慮と情熱をしめすその黒い大きな目は、この瞬間、世にも恐ろしい憎悪の色に燃えていた。濃い栗色の頭髮がごく低くまで生え下がっているのです、額が狭くて、怒ったときにはいじわるそうに見える。……》(p.17)

この時から、読者はジュリアンから目が離せなくなり、以後ほとんど彼と共に、物を見、人物を観察し、思考するのである。

ヴェリエールの町や、ソレル親子や、老軍医や、シェラン師達を一人の旅人の目と耳を借りて簡単にでも描いているのは、理由がある。町も、今述べた人達も、にジュリアンの旧知のことなので、彼の観察の対象にはなり得ないからである。彼の観察は常に彼の修業にならねばならない。後になっ

て、ジュリアンの友人、フーケの肖像が与えられるが、それは決して彼の目を通して描かれていない。フーケは彼にとって既知の人物であるから、観察の対象にならないのである。それは一般的に描かれていることでわかる。

レナール氏の屋敷へ彼が行った、その時から彼の初めて見るものの連続になる¹⁾。こうして彼は観察し、考察し、自己の野心を満足させるために一つ一つ学んでいくのである。彼は意識的に偽善者になろうとしているのだ。だから、彼が一人歩きを初めた《第一步》²⁾として、《偽善に役立つだろう》(p. 22)と教会に立ち寄るが、それは極めて暗示的である。彼はそこで、ソレルと語尾が同じである《ブザンソンで処刑されたルイ・ジャンレルの死刑ならびにその最期にかんする顛末》(p. 25)と書かれた紙片を見つけ、次に聖水を血と見まちがう。これは明らかに、彼の未来を予告している。因に、この教会は、後に彼がレナール夫人を撃つ場所となるのである。

ジュリアンとレナール夫人が初めて会う、あの感動的な場面は、その前の章で彼女の悩みを書くことによって、読者を巧みに彼女の側に引き寄せ、主にレナール夫人のまなざしで描かれる。彼女が、今度来る家庭教師を粗野で醜悪であろうと想像すればする程、《女にでもしてみたいようなみめかたち》(p. 28)をしたジュリアンに対する感嘆は大きくなる。

《レナール夫人のほうはまた、ジュリアンの美しい色艶、大きく黒い目、そして愛らしい頭髪——頭を冷やすために、さっき広場の噴水盤のなかへつけたものだから、平生よりもずっと縮れていた——にすっかり騙されていた。》(p. 27)

こうして、レナール夫人は《ジュリアンの無類の美貌に打たれ》(p. 28)るが、ジュリアンの方も、最初彼女を見た時《その美貌に驚いて、はや彼はすべてのことを、自分はいったい何をしに來たのかさえ忘れてしまった》(p. 26)程である。この出会いは、マチルドとのそれと較べた時、何んという違いがあるか、そして、何んと運命的であろうか。ジュリアンとマチルドが初めて会った時、というよりむしろ、彼が一方的に見るだけだが、のちに述べるように、彼は admiration を感じていない。又、彼の観察の一方通行、つまり、マチルドが彼を観察しないことでも（作者がそれを書かないことでも）、彼女はジュリアンに全く特別な感情を抱かなかったことが想像される。このように二つの出会いのあり方が対照的であることから、二つの恋愛が本質的に異なっていることが示される。

この場面ではまだ黒服を着ていないジュリアンであることも、とりわけ新鮮な印象を与え、レナール夫人と同様、読者も記憶にきざまれる。ジュリアンの黒服——それは確かに偽善の意味であるが——は、後の野心をかきたて、自己を隠すのに都合がよい。黒服をまとった時から、ジュリアンの態度は変わる。そして、多分、牢獄の中で死を前にする時でなければ、二度と、あの純情なジュリアンに出会うことが出来ないであろう。

黒服を着たジュリアンが、レナール家で、偽善の修業をしている内、レナール夫人のかすかな心理

の動きの方が、ジュリアンのそれより詳細に描かれる。その徐々にジュリアンに引かれ、夫から離れていく、田舎の、世間知らずの夫人の心理描写は簡潔で的確である。

「あの新しい獲物を、お前はどう思うね」とレナール氏が妻にたずねた。

たしかに自分にもそれと気がつかない、ほとんど本能的な心のはたらきによって、レナール夫人は夫に嘘を言った。

「あたしあなたほど、あの田舎者に夢中になっちゃいませんわ。」……》(p. 31、傍点筆者)

《……この犬の苦しがあったありさまをきいて、夫は例の高笑いをしたが、そのときジュリアンのあの美しい三日月形の、黒い眉がひそめられるのを、彼女は見逃さなかった。寛い心、高尚な魂、人間らしさ、そういうものはこの若い僧侶以外の人には存在しない。彼女にはしだいにそう思えてきた》(p. 37)

《『あの人はジュリアンを辱しめようとしている。しかもそれはあたしの犯したあやまちのために！』彼女は自分の夫が恐ろしくなって、両手で顔をおおうた。もうけっして打ち明けはしまいと、かたく誓った。》(p. 39)

《こういう無知のおかげで、レナール夫人はこのうえなく幸福な気分で、たえずジュリアンのことばかり考えていながら、自分をとがめるような気持などは少しもなかったのである。》(p. 43)

このようにレナール夫人がジュリアンに引かれていくのに対し、ジュリアンの方は、彼女を、その夫と同様敵とみなし、恋には無頓着である。レナール夫人のやさしい心づかいより、レナール氏を相手に小さな駆け引きに勝利することを喜んでいたのである。彼にのぼせあがった小間使いのエリザは、かわいそうに、彼に見られさえない。彼女がレナール夫人に、ジュリアンに結婚を断られたと言って泣きごとを言っている時、

《レナール夫人はもう何も聞いてはいなかった。あまりのうれしさに理性の働きを奪われたようだった。》(p. 46)

レナール夫人の心の中は、このジュリアンの結婚話しが一つの契機になって、新たな段階に入るのである。

《『あたしジュリアンに恋しているのだろうか?』やっとな彼女はわが胸に問うてみた。》(p. 47)

そして、次に重大な契機はジュリアンの旅行である（マチルドともそうだったが、その時はジュリアンは非常に作為的であった）。

レナール夫人が自分に運命的な問いかけをした頃、レナール家は、別荘のあるヴェルジーという村に引越す。ジュリアンのヴェリエールに対する憎悪が——それも父親と兄達が住んでいるからなのだ——彼にヴェルジーを非常に気に入らせる。それはヴェリエールの本宅より詳しく、庭園や畑、屋敷について描写されていることでも、暗にうかがわれる。リンゴの木、果樹園、胡桃の木、あの菩提樹。田園の中で、ジュリアンは自然の子のように生きかえる。又、この村の空気はレナール夫人をも活気づける。こうして、二人は田園と自由を満喫する（レナール夫人は夫の存在を忘れる程に）。

しかし、あの小事件（第8章）がきっかけで、ジュリアンにスポットライトが移され、彼の頭の中に、再び陰謀と、術策が息を吹きかえし、レナール夫人を誘惑することに、ナポレオンの勝利をめざす。彼の心から階級的憎悪が消えないのである。

『この女から見れば、このおれなぞは、生まれがよくないんだぞ』（p.77、傍点作者）

一方、レナール夫人の方は、彼にうっとりしているのである。このような頑なまでの上流階級への敵意が、ふと何気なく、幸福の瞬間にも、ジュリアンの頭に浮かぶ。それは二人の愛の障害になるが（尤もジュリアンが勝手に障害を作っているように思われるが）、彼女の完全な犠牲的愛情を目のあたりに見て、ジュリアンは真に夫人を愛するようになる。こうした、夫人との恋愛は、後に見るように、マチルドとの恋愛とは全く別個のものである。この、時々レナール夫人が母親のように見え、ジュリアンが子供のように見える恋愛は、アンリ・ブリュラルが七才の時、母親を愛したような趣がある。実際、アンリの母親が死んだのは、レナール夫人と同年輩の二十八から三十才位であった³⁾。ジュリアンもアンリも母親がなく（ジュリアンはそのことを全く考えもしないが）、父親を憎みながら生長したという共通点を持っている。こうなると、ジュリアン・ソレルと作者が、ルソーの「告白」の愛読者であったことと、ジュリアンとレナール夫人とのみずみずしい最初の出会いとが同時に思い合わされる。しかし、性急に断を下すのは危険すぎるだろう。ともあれ、この田舎ヴェルジーでの恋愛と、後のマチルドとの恋愛とは違う。まるで、作者は、田舎の恋と大都会の恋との相違を示しているようである。

ジュリアンが、どんなに色々な体験をしても、最後に帰りつく場所は、レナール夫人との幸福に結びつくこのヴェルジーである。田舎者ジュリアンは本質的に都会の空気が合わないのである。

彼が野心を満足させて、貴族になり、中尉となって、ストラズブルを極上の馬に乗っている姿はどうであろう。確かに、彼は幸福の極みにいる筈である。しかし、からかい好きの老将校達は次のように言っている。

《この青年には何一つ欠けたものがないね。ただ若々しさがなければ》(p. 446)

彼はこれからの出世を考えて、更に野心に燃えていたのである。が、都会の空気、とりわけ、都会の、駆け引きのような恋愛 (l'amour de tête) が、彼から若さを奪い取ってしまった。無理につけた偽善の仮面が、ようやく彼になじみ始めて来る。その時、レナール夫人の一通の手紙が、やっと手に入れたその仮面をはがしてしまうのである。彼には、山や森や川や田園がどうしても必要なのである。皮肉にも、彼の出世は《ヴェリエールを去ることであった》(p. 23) が、彼の幸せは、ヴェリエールに近いヴェルジーのような田舎にすむことだったのである。彼は牢獄の中で思う。

『ふしぎなことだ！ あの人がラ・モール氏にあんな手紙を書いたので、これでもうおれの将来の幸福はすっかり台なしになってしまった、とおれは思っていた。ところが、あの手紙の日付からまだ二週間とたたないのに、あるとき一生懸命に考えていた事柄に、今すっかり興味を失っている。あのヴェルジーのような、どこかの山国で静かに日を送る二、三千フランの収入があったらなあ！ ……思えばあるとき、おれは幸福だったのに……。おれは自分の幸福を知らなかった！』(pp. 456-457)

ジュリアンが山や森を愛するにもかかわらず、読者は彼の目を通してそういう自然風景を見る機会が非常に少ない。バルザックと異なり、町を詳しく描かないスタンダールは自然描写にも筆を惜しむ。彼の興味の対象はあくまで人間の心理である。しかし少ない故に、スタンダールの自然描写はそこに立ち合う登場人物の心理を露骨にあらわす。「赤と黒」の中の数少ない自然描写はジュリアン・ソレルの心理をその風景と共に読者に印象づける。それどころか、その風景がジュリアンにとって存在するのと同様、読者にも存在するようになる⁹⁾。それ程あざやかになる。

レナール家で、自己の鍛練を怠らないジュリアンは、その疲れをいやすかのように、まれにだが、自然の風景を前にする。

人は自然の美しさに——それが雄大なものであれ、一輪の草花のような小さなものであれ——心を打たれ、心をなごませる。しかしジュリアンが心を動かされる自然は常に雄大さを持っている。それは、《大森林》であり、《岩の巨塊》であり、《樺の巨樹》であり、足下に見わたせる《二十里にわたる地方》である。この雄大で静かな風景の中で、彼は《巨岩の上に》立ち、見る。

《隼であろうか、ときおり彼の頭上の大きな岩のあいだから飛び立って、羽音も立てずに巨大な円弧を描くのが認められた。ジュリアンの目は、機械的にその猛禽のあとを追っていた。その静かな、しかも力のこもった運動が彼の心を打った。彼はその力を羨んだ。その孤独を羨んだ。

それはナポレオンの運命だった。いつの日かそれはまた彼自身の運命となるであろうか》

(pp. 62-63、傍点筆者)

このように雄々しく、静かで、力づよい風景を前にした時、彼は、敵の前では決して口に出してはいけぬ異教の神を思うことができる。彼の風景は、その神を表象しなければならない。力づよく、孤高でなければならない。ジュリアンが意識的に見る唯一のこの風景と友人のフーケの所に行く時に見る《ブルゴーニュやボージョレの豊饒な平原》(p. 71)、《広濶壮大な風景》(p. 71)とがはっきりと読者に刻印される。この風景こそ、ラスティニャックがパールラシェーズの墓地から俯瞰したパリと同様、ジュリアンにとって野心を意味したのである。

彼は一羽の猛禽として生き、伶俐に物事にあたり、ナポレオンの運命を歩まねばならなかった筈である。

《しかしながら、彼はヴァルモンのような残酷な不実も、ラスティニャックやマルセイのような乾いた心も、ロベール・グレスルーのようなサディクで冷たい好奇心も、ベラミのような無知な野卑も持ち合わせていない》⁹⁾

彼は Arriviste になるには、あまりにもレナール夫人を愛しすぎ、あまりにも感受性が強すぎ、あまりに高潔すぎたのである。彼は成功の瞬間に、マルチノの言葉を借りれば《あんなにも長い偽善の果実をつかみとろうとした》⁹⁾ 時に、全てを犠牲にしてしまう。彼は偽善者には向いていなかったのだ。作者が言うように (p. 193)、彼は芸術家に向いていたのだろう。

ブザンソンは後に行く町と異なり、ジュリアンの目を通して、簡単にだが描かれている。

《とうとう、彼ははるかに彼方の山の上に黒い城壁をみとめた。それがブザンソンの保塁であった。》(p. 161)

この黒い城壁は、これから送る暗い陰うつな神学校を暗示しているのだろうか。ともあれ、遠くから眺めるこの風景は、ジュリアンがこれから未知の都会にのり込もうとする意気を感じさせる。彼は生まれて初めて都会にやって来たのであった。この田舎者が、彼に似つかわしくないカフェに行ってもどんなにぎこちないか (パリでも同じだが)、一目瞭然である。彼は非常な好奇心を持って、カフェにいる都会人達を観察する。

《二組の突きが、今まっ最中であった。ボーイが大きな声でゲームをとっている。見物のたかった球台の周囲を、競技者たちが駆けまわっていた。煙草の煙の波が、皆の口からふうと吹きだされて、この連中を青色の雲でくるんでいた。……》(p. 162)

ジュリアンと彼らとは大変なへだたりがある。作者の言葉を使えば《俗に》なっていない、いや死ぬまでならないであろうジュリアンは、彼らの仲間になることはできない。そして、上の引用のように、ジュリアンが複数の人間を見る時、絶対に、彼らと通じあう基盤のない関係になっているのがわかる。彼は彼らの中に入り込んで見ない。いつも外側から眺めるだけである。彼らは、ジュリアンにとって、一応修業のために見ておかねばならぬ絵である。それと同種の絵で他に、神学校の同僚達、ラ・モール邸での貴族、とりわけマチルドを囲む若者達がある。彼は田舎者の本能で彼らを警戒し、観察する。彼は時には尻ごみし、時には感嘆し、時には侮蔑する。いずれにしても、彼は常に孤立する。

神学校へのり込む時も、ジュリアンは遠くからその十字架を認めるが、このような遠望は、先程のブザンソンの眺めと二つだけである。パリや他の町に行った時も、レナール家やラ・モール邸に行った時も、彼はいつのまにかそこに着いている。こういう所に、ジュリアンがなみなみならぬ覚悟をきめて、ブザンソンに來、神学校へ入学しようとしていることが示されている。この神学校の修業こそ、彼にとっては、都会における初めての他流試合であり、具体的に立身出世の糸口となる筈だからである。

神学校という、陰うつなイメージを証拠だてるように、彼は最初に会った門番に恐怖を抱く。この奇怪な容貌をした門番に案内され、ジュリアンは、彼にとって重要な意味を持つピラル神父と会う。彼は神学校長のするどいまなざしに射すくめられる。

《ジュリアンの目はくらんできたが、それでもかろうじて、額のほかは、真赤な斑点で一面におおわれた長い顔を見わけることができた。額は死人のように蒼白がった。この赤い頬と蒼白な額とのあいだに、どんな気強い者にでも、恐怖の念をあたえずにはおかぬ、小さい黒色の目が輝いていた。額の広大な輪郭を、べったりなでつけた漆黒の髪が、くっきり縁どっていた。》(p. 169)

ジュリアンは、このまなざしに耐えられずたおれてしまった程である。彼はこうして、十分これからの神学校の恐ろしさを思いやる事が出来る。しかし、時がたち、(その潔癖さを知るにつれ)、このピラル師に対する恐怖が、ジュリアンも読者もうすらぎ、更に、ラ・モール邸では、この恐ろしい(迫力のある)ピラル師が、たんに醜い顔をした男になってしまい高潔ささえ感じられなくなってしまう。それは、ジュリアンが次々とすぐれた人と会う、修業の成果であると考えることが出来る。

その第一は、副司教のフリレール師である。ジュリアンは彼をじっと観察する機会を持つ。

《……この顔は、その目鼻立ちのところどころに現われている。そしてもしこの顔の持主が十分気をつけていないと何か虚偽の感じを出しそうな、非常に怜悯なところがなかったら、

もっと重々しいものになっただろうと思われる。……今までこんな風になっている僧侶を見たことのないジュリアンには、それがたいへん気にいった》(p. 204)

彼はこのように上流社会の人物を非常な好奇心を持って、観察する。次に、彼の野心の対象であるブザンソンの司教である。彼は、じっと観察はできなかったが、好運にも長時間話しをする機会にめぐまれる。しかし、彼は彼なりに重要な点を見る。

《彼が部屋にはいると、ヴァルノ氏などよりりっぱな身なりをした従僕が二人がかりで猊下のお召物を脱がせていた。》(p. 205)

ジュリアンの最も嫌いなヴァルノ氏⁷⁾はヴェリエールではばをきかせているが、その人物より、従僕の方がりっぱな身なりをしているのである。国王がヴェリエールに来た時、彼が見たアグドの司教の若さ(彼よりたった六才位上である)と、このブザンソンの司教の財力(それは従僕を見ればわかる)は彼の野心をかきたてる。そして、彼がそういう地位に登りつめるには何が必要かをブザンソンの司教は彼に示す。

《自然とそなわっている威厳に、あのような都会的優雅さがとけこんでいる様子は、いまだかつて彼の思いもよらなかったことだ。》(p. 207)

彼が学び取らねばならないのは、《都会的優雅さ》である。それはピラル師をすら、くすんだものにしてしまう。《都会的優雅さ》を修業するには、ヴェリエールやブザンソンでは不可能である。そのためにはパリの大貴族の家に入り込んで生活しなければならない。田舎者が、都会人になろうとする。

初めて見たパリは、ジュリアンに何の感動も起こさせない。たとえ、ヴェリエールでレナール夫人と過ごした幸福に心を奪われていたとしても、田舎者が初めてパリにやって来たにしては味もそっけもなさすぎる。しかし、マルメゾンに行って涙を流してくるジュリアンを見ることはできる。パリは、彼の神・ナポレオンがいたことがある、という意味でしかない。そこで、時計を盗まれるという、ファブリスがしそうな滑稽な失敗をして、ブザンソンの時以上に彼は田舎者ぶりを読者に示す。

しかし、ジュリアンがパリを観察しないのを非難するのはあたらない。彼はパリに住むのではなくて、ラ・モール邸に住むのである。

《いかめしい門番、ことに中庭の清潔さに彼はすっかり感心した。太陽が美しく輝いていた。「なんという壮麗な建物でしょう！」彼は、師に言った》(pp. 236-237)

彼にとってこれがパリ＝都会の印象なのである。ラ・モール邸こそ彼が戦わなければならぬ戦場であるし、その主人ラ・モール侯爵こそ彼の最大の敵になる筈である。彼は侯爵を《絵にでも描こうとするように》⁹⁾ じっと観察する。こうして侯爵はジュリアンに二度観察される。一度目は、ブレ・ル・オの修道院の中である。

《彼はほとんど刺繍もない服を着た目つきの鋭い小男にはじめて気がついた。しかしこの男はごく質素な服の上に、空色の授章をおびていた。…略… 彼はしばらくして、それがラ・モール侯爵であることを知ったが、えらそうな、いや横柄にさえ見える態度をした男だと思った。》(pp. 107-108)

彼は侯爵をアグドの司教より慇懃ではないと結論するが、このことから彼の眼が肥えていないことがわかる（その時彼の修業はまだ初まったばかりだったのである）。二度目はすでに、ピラル師、フリレール師、ブザンソンの司教、というような人達と会ってきたあとだけに観察と評価が的を得るようになってきたことが窺える。

《……そこに、金髪のかつらをかぶって、鋭い目つきをした、小柄の痩せこけた男がいた。…略… あまり躑躅な態度なものだからジュリアンは侯爵とはなかなか思えなかった。ブレ・ル・オの僧院で、あんなに高慢な面構えをしていた大貴族の面影はもう少しもなかった。……しかし彼はやがてこの侯爵はあのブザンソンの司教などよりずっと、相手に好感をあたえかつ慇懃であることがわかってきた。》(pp. 238-239)

ブザンソンの司教と比較しているが、彼の観察に常に比較が伴うのは当然である。とりわけ、ラモール邸に来てからは、彼がすでにヴェリエールとブザンソンで色々な体験をしたあとであるからなおさらである。その種の比較の中でも、マチルドとレナール夫人のそれはたびたびである。

彼の住むことになったラ・モール邸は、アウエルバッハが指摘したように⁹⁾、王政復古時代における貴族社会の縮図である。ジュリアンはその社会を支配しているものに気づく。それは、彼の故郷ヴェリエールでのように金もうけではなく、慇懃さ、軽妙な洒落、さしさわりのない会話、無感動、一口に言ってしまうと、退屈である。そこにはジャコバン＝革命に対する恐怖¹⁰⁾ が無言の内に漂っている。そういう世界こそ、ジュリアンが入り込もうとしている世界なのである。貴族と食事を共にすることを名譽に思っている成り上がり者のピラル師にジュリアンはその退屈のやりきれなさをぶちまけるが、師にたしなめられる (p. 253)¹¹⁾。同じ田舎者でもジュリアンはピラル師より高潔である。別の言い方をすれば、ジュリアンの方がこの社会になじむのに無器用だ、ということである。

この社会の若者達に欠けているものはエネルギーだが、ジュリアンにはそれがある。しかし、貴族社会において、エネルギーはジャコバンと紙一重であるから恐れられる。ジュリアンと娘との関係を

知って、ラ・モール侯爵は、ジュリアンの才能を認めつつも、《この男の性格の奥底におれは何かしら気味のわるいものを感じる》(p. 442) と独語するが、その《気味のわるいもの》を息子のノルベール伯爵はすでに読み取っていた。

「あんなにエネルギーのある若者には気をつけたほうがいいよ」と兄が鋭く言った。「また革命でもはじまったら、われわれをみんなギロチンにおくってしまうにちがいない。」(p. 312)

泥くさい、田舎者じみたエネルギーがダントンを生むのである。ジュリアンは無器用にも彼の敵にそのエネルギーを嗅ぎ取られている。尤も、そのために、精気のない貴族の若者達を軽蔑して、退屈しきっているマチルド嬢がジュリアンに恋をしかけるのであるが。彼女は、ジュリアンが《ダントンになるだろう》(p. 312) と思う。

ラ・モール家での初めての晩餐の時、ジュリアンはその家の人達を次々と（と言っても三人だが）観察する。最初は侯爵夫人である。

《彼はジュリアンを背の高い、容体ぶった一人の婦人に紹介した。それが侯爵夫人だった。ジュリアンは、聖シャルルの日の晩餐に来た時の、ヴェリエール郡長モジロン夫人にちょっと似て、もったいぶった女だと思った。……侯爵夫人は彼などにてんで目もとめてくれなかった。》(p. 242)

彼は当然、彼女に対し悪い印象を持つ。そして多分、気を悪くしていたのであろう。一度会ったことのあるアグドの司教を見い出した時、彼は非常に喜ぶから。

《……しかし、彼はこの田舎者が誰であるか、思い出そうとさえしなかった。》(p. 242)

このように、彼は貴族の高慢さをまともに見せつけられ、又、この場の雰囲気、陰気で窮屈なものに気づく。そこにノルベール伯爵がやってくる。

《口髭をたくわえた、じつに青白い、またじつにすらっとした美青年が六時半ごろそこへはいって来た。とても小さい顔をしていた。》(p. 242)

ノルベール伯爵はジュリアンが初めて見た上流社会の貴公子である。ジュリアンには感じのよい青年に思われたので、彼が意地悪くて、ジュリアンをいじめるだろうとはとても思えない（ピラール師

がそう警告したのである)。上流社会に入ったジュリアンは、こういう貴公子が全て慰撫で、感じがよい、ということを知らない。彼らは常に美青年で、気がきいたことを言い、快活で、つまり申し分のない紳士なのである。又、彼らは慰撫さの仮面をかぶり、感情を表に出さずに、どんなことにも驚かない。その典型としてノルベール伯爵がいる。彼の顔が小さいのも上品さの表われであろう。後になって、顔ではないが、頭の小さい紳士が二人描かれるが、ジュリアンにも読者にも、この三人が貴族の典型であることがわかる。

その一人は、ジュリアンと決闘するボーヴァジ騎士である。

《人形のように装った背の高い若い男がそこにいた。その目鼻立ちは、ちょうどギリシャ美のようによく整っていたが少しも感情が現われていなかった。驚くべく小さい頭にはとても綺麗なブロンドの頭髮がピラミッド型に生えていた。》(p. 266)

又、もう一人は、ジュリアンがある陰謀の集会で見る公爵である。

《この公爵は年は五十くらい、ダンディな着こなして、まるでバネ仕掛のような歩きかたをした。頭が小さく、鼻が大きく、…略…これ以上上品な、これ以上無表情な態度はなかなか真似ができるものではない。》(p. 374)

この二人の人物は、特に詳しく、少々カリカチュア化されて、貴族の特徴が描かれている。彼らの共通点は明らかである。それに対し、ダントンの頭はどうだっただろうか。ジュリアンが都会風になり、出世するために、彼らのような仮面をつけ、彼らのような態度を身につけなければならない。一体そんなことが可能だろうか。

最後に登場するのはマチルド嬢である。

《ほとんどそれと同時に、すばらしい金髪でたいそう姿のいい若い女が自分の向いがわに坐るのを彼は見た。好ましいところはなかったが、よく見ていると、こんなに美しい目は、かつて見かけたことがないように思うようになった。しかし、その目は恐るべき心の冷やかさを物語っていった。》(pp. 242-343)

彼はピラール師から、あらかじめラ・モール家の家族について、その簡単な特徴を聞いておいたのだが、不思議なことに、マチルドについては、ただ娘がいる、としか聞かされていない。つまり先入観なしに、彼は彼女を見たのである。

この観察は、それが観察である限り、レナール夫人と出会った時のような感動はない。ジュリアン

は、レナール夫人を観察したのでなく、美しさに打たれてしまったのである。彼は、マチルドが——特にその目が——美しいのを認めているが、彼女を好ましいとは思わない。それどころか《彼女は、彼がますます嫌いになってきたその母親に、なさけないほどよく似ているのだった。》(p. 243) と思うように、彼にとって、彼女は嫌いなタイプなのである。しかし、レナール夫人とは違って、マチルドは、ジュリアンにとっても、読者にとっても、付き合い、知りあうにつれ徐々に魅力的になっていく女性なのである。そういう魅力は才知を伴って初めて現われるからである。

さてこのあと、ジュリアンはあるアカデミシエンと論争をするが、ここにスタンダールの特徴の一つがあらわれる。この会食には確かに今述べたラ・モール家以外の人が何人かいるのだが、彼らの姿は全く描かれていない。ジュリアンの論争する相手であるアカデミシエンも、論争の内容は書かれているものの、その口調さえ書かれていない。しかし、このように肖像が描かれないうのは、そのあわれなアカデミシエンだけではない。後のラ・モール邸という章ではマチルドのとりまきで、あれ程名前がひんぱんに出る人達も同様である。ピエール・ジョルジュ・カステックスは次のように言っている。

《副次的な登場人物達の中であって、ある人達はいかなる方法によっても描かれてはいない。つまり、リュス氏やケリュス氏はその影さえもなく名前だけである。どんな特徴表示も欠如しているのは、彼らが下らない人物で、無価値であるということに通ずるように思われる。彼らは存在していない。》¹²⁾

彼らは（影だけは持っているクロアズノアも含めて）ジュリアンにとって、個人としての観察対象にならない。彼らの役割は、その名前ですらラ・モール邸を飾る道具でしかない。又、前に見たアグドの司教や、ブザンソンの司教のように、ジュリアンにとって意味ある部分だけを書くという作者の筆の節約は、ここ、ラ・モール邸でもなされている。例えばそれは、フェルヴァック元帥夫人である。このラ・モール邸と題された章で、この夫人を除いて誰も肖像を、そのわずかな特徴さえも描かれていない、というより、ジュリアンは観察していない。しかし、彼女だけは別である。

《彼女の目とまなざしが、レナール夫人のままだった。》(p. 260)

このわずかな特徴が、後にジュリアンをして、マチルドに嫉妬心を起こさせるために、フェルヴァック夫人に言い寄らせるのである。

この、スタンダールが一挙に貴族社界の典型を描いているラ・モール邸という章では、その貴族達の肖像は描かれず、単に彼らの名前とその人達についての寸評——それもほとんど登場人物の口を借りてなされているが——だけが書かれているにすぎない。そのためにかえって、ジュリアンが見ているように、読者もその世界をというよりその時代をざっと見わたすことが出来る。彼らが帰って行った時、

《『これでおれは自分の地位とは反対の極を見ることができたのだ！』》(p. 261)とジュリアンは思う。

ジュリアンがパリを初めて見た時、パリの描写がないのと同様、いやそれ以上に、初めて行ったロンドンの描写はない。だから、このロンドン滞在は読者にとってあまりに印象が薄いので、特別彼がロンドンにいる、という感じがしない。それは、後にジュリアンが密命を帯びてメッスやストラスブールに行った時も同様である。結局、これらの町の風景や特徴はどれも等価なのであり、地理的な意味でのその町の位置と、読者にある特定のイメージを与えるその町の名前だけに意味があるのである。

しかしながら、ストラスブールで会ったコラゾフ公爵は重要である。ジュリアンはすでに一度ロンドンで彼と会ったことがあるのだが、その時は、その公爵についての描写はなかった。が、このストラスブールではジュリアンは公爵をじっくり観察する。ロンドンとストラスブールでは、ジュリアンの心理状態は大変な違いがあった。初めてコラゾフと会った時には、ジュリアンはまだマチルドと関係ができていなかったが、このストラスブールでは、彼はマチルドに恋いこがれる意気地のない青年になっていたのである。

《彼はこの美青年を驚異の眼をもって眺めていた。その水ぎわだった乗馬ぶりに感服しているのだった。》(p. 391)

彼の持っていない、そして多分一生自分のものにできないコラゾフの性格、上品さ、ばかばかしさを彼はうらやましがる。しかし、ジュリアンは大変な思い違いをしている。もし、彼がコラゾフの様な人間なら、マチルドの関心を全然引かなかったであろうから。ともあれ、彼はコラゾフ公爵の忠告を受け、恋の駆け引きを教わる。一見滑稽なこの恋の駆け引きが、ジュリアンに恋愛とは別の（確かにマチルドを手に入れることができるが）重要な意味を帯びてくる。

ここに、ジュリアンのマチルドへの思いの激しさを示す証拠が二つある。一つは、

《ラ・モール嬢に少しでも関係のないことを考えることなどは、とうてい彼の力におよばなかった。…略…

心にあるのはただもうマチルドのことばかりだった。》(p. 390)

もう一つは、コラゾフ公爵の提供した出世の糸口を拒絶してしまうことである。材木商の息子が一人の女性のため、莫大な財産と大佐という身分をあきらめるのである。

こうしてジュリアンは友人の忠告通り、友人からもらった恋文をフェルヴァック夫人に写して送り、マチルドによそよそしくする。この作戦はコラゾフの予言した通り成功するが、マチルドの移り気を十分承知しているジュリアンは、成功をより完全なものにするべく、大変な忍耐をして、冷たい態度で接しつづける。彼が、こうしてやせ我慢をし、自己を偽りつづけているうちに、彼の気づかな

い所でマチルドへの愛情が少しずつ変化してしまう。マチルドが狂おしく彼をしたっているのを確認したジュリアンは一人部屋で思う。

《彼は自分を一つの大戦闘において半ば勝利をおさめた將軍に比較してみた。『勝ち味は確かだ。……』》(p. 425)

《『敵を恐怖させるんだ』》(p. 425)

このように勇ましい言葉がジュリアンの口からもれるが、こうなると作者の意見と同様《恋の満足というより、むしろ自尊心の》(p. 425) 満足だ、と言いたくなる。

《『レナール夫人はいくらうれしい最中でも、おれの愛しかたがあの人のおしかたより足りないのじゃないかと、いつもそればかり気にしていた。ところがここじゃ、おれの征服しようというのは悪魔なんだ。そうだ征服してやらなくっちゃならない』》(p. 425)

これは明らかに愛ではない。策略を用いて自尊心の強いマチルドを手に入れようとしている内に、彼女を征服する、ということが、ジュリアンの胸の中で愛より先行してしまう。逆接的だが、彼のとった策略は愛におぼれては不可能なのである（少なくとも愛におぼれた田舎者には）。彼の師であるコラゾフ公爵は仕事を^{する}時、すなわち女性を誘惑する時、愛におぼれてはいないであろう（ヴァルモン男爵を思い浮かべればよい）。

こうして、コラゾフの指導通りふるまうことによって、ジュリアンは、貴族の持っている無感動や偽善の仮面が少しずつ身についてきたのである。マチルドの妊娠によって、彼の野心は一層具体性を帯びる。

コラゾフ公爵の恋の手ほどきは、ジュリアンにとって、結果的に、野心家としての最後の授業となつたのであり、マチルドを誘惑するのに用いた策略は、彼の偽善者としての仕上げだったのである。ストラズブルでのコラゾフ公爵との出会いこそ、この野心家を完成させる契機であった。ジュリアンはもはやマチルドを愛していない。

《いまはただ自分の榮譽と、生まれる子供のことの^{のみ}が彼の心にかかることだった。》(p. 447)

こうして、ジュリアンを見るなら、レナール夫人の一通の手紙が彼を半狂乱にし、彼をしてヴェリエールへ夫人を撃ちに赴かせたのも理解できる。

レナール夫人のジュリアンに対する非難、つまり、彼が野心家で、偽善者で、女性を誘惑し、地位と財産をねらう人間だという非難が、その時のジュリアンをびたりと言ひあてている。多分、この手

紙を読むまで、彼自身これ程の自己分析はしていなかったであろう。更に言えば、この手紙で、彼は自分がいかに卑劣であるか卒然と理解してしまったのであろう。それに加えて、ジュリアンがレナール夫人を愛したのも彼の野心から来たものだという夫人の主張、それは、マチルドとの関係と正反対に不当なものであり、ピュール・マルチノが言うように《彼は彼女に対し、愛を裏切られたという恨み》¹³⁾を抱いたのである。そういったものが混然として、彼を本能的に夢遊病者のようにし（実際彼は夢遊病者だったと主張する人がいるらしいが）¹⁴⁾ヴェリエールへとせきたて、ピストルを買わせ、発射させたのであろう¹⁵⁾。

このように、ジュリアン・ソレルが観察し、修業をかさね、成功の一步手前で失敗してしまうのは、田舎者が都会に出、それに順応しようとしたが、ついに都会人になれなかった不幸と符合する。「赤と黒」の主人公は、ナポレオンを崇拜し、自己の立身出世を夢みる。彼の、そのあまりの野心が自分にとっての真の幸福とは何か、の判断を誤らせた。王制復古時代は正にナポレオンの神話の生まれた時代である。又、バルナーヴやダントンやロベスピエールの名は、その時代の人達の記憶にまだ新しかったことだろう。野心家は常に田舎者である。彼らは野心に満ちて、田舎からパリへと集まったのである。貧しいながら、教育を受けたジュリアンが彼らのように大都会へ行ったのも不思議はない。しかし彼の時代は、ダントンやナポレオンの時代とは何んという違いだったろうか。そして、果して、ダントンやナポレオンが、ジュリアンのようにあれ程無理強いして自分を偽善者にしたであろうと意識したであろうか。彼らはもっと自分に忠実だったのではないだろうか。ジュリアンの不幸は、立身出世のために、自分の理想の世界とは正反対の世界に身を置かねばならない所にあった、と言える。この小説が田舎者ジュリアンが生きた時代の年代記でもあることを忘れることはできない。

〈注〉

- 1) 今述べた友人フーケは例外である。
- 2) この第一歩という言葉は、教会で拾った紙片の裏に書かれている。極めて暗示的である。
- 3) *Vie de Henry Brulard*, p. 29.
- 4) *Le Rouge et le Noir de Stendhal*, p. 171. を参照。
- 5) *L'oeuvre de Stendhal*, p. 353.
- 6) *ibid*, p. 360.
- 7) ジュリアンは彼を観察している。《黒くあつぽったい頬髭、ふんだんな髪の毛、頭の上にゆがめているギリシャ帽、ばかに大きなパイプ、刺繍入りのスリッパ、胸の上であちこちに交叉している厚手の金鎖、すべてこの自分を天晴れ色男と信じている地方財務官の身ごしらえに、ジュリアンはちっとも圧迫を感じなかった》(p. 138) ヴァルノ夫人も悪意ある書き方をしている。
- 8) ピラール師がそう言ってジュリアンをたしなめたのである。(p. 239)
- 9) アウエルヴァッハ ミメーシス、下巻、p. 208.
- 10) レナール夫人も恐れている。(p. 96)
- 11) アウエルヴァッハは、この部分を引用して《このシーンは、情熱的な、そしてきわめて悲劇的な一つの恋愛物語を準備》し、その当時の貴族社会をとらえていることを指摘している。(pp. 207-209)

12) *Le Rouge et le Noir de Stendhal*, p. 173.

13) *L'oeuvre de Stendhal*, pp. 361-362.

14) Charles Du Bos がその一人である。

15) ジュリアンがパリからヴェリエールに一足跳びに行く時、彼の意識がいかに混乱していたか、巧みな作者は一言書き加えておくのを怠っていない。以下の通りである。

《この急ぎの途上から、マチルドに手紙を出そうとしたが思うように書けなかった。彼の手は紙の上に字の形をなさぬ線を引くのみであった》(p. 449)

テキスト 参考文献

Stendhal: *Le Rouge et le Noir*, CLASSIQUES GARNIER.

Stendhal: *Vie de Henry Brulard*, CLASSIQUES GARNIER.

Stendhal: *La Chartreuse de Parme*, CLASSIQUES GARNIER.

アウエルヴァッハ: ミメーシス、筑摩叢書 76。

M. Bardèche: *Stendhal Romancier* éd. de la Table Ronde, Paris, 1947

P-G. Castex: *Le Rouge et le Noir de Stendhal* éd. Société D'édition D'enseignement supérieur, Paris 1970

Henri Delacroix: *La Psychologie de Stenhal* éd Librairie Félix Alcan, Paris, 1918

Henri Martineau: *L'oeuvre de Stendhal* éd. Albin Michel. Paris, 1951